
あの夢を見たのは・・・いつだったっけ？

心乃 真架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの夢を見たのは・・・いつだったけ？

【Nコード】

N4645Y

【作者名】

心乃 真架

【あらすじ】

組織に追われていた少年少女たち。いつしかこの少年少女たちは互いに支えあうようになった。…内容が変わったらゴメンナサーイ！！

プロローグ(前書き)

初めまして^^

プロローグ

あの日、私は言葉を聴いた。

その声は酷く細い声だった。

その声は私に言ったのだ、ただ伝えるために。

「あなたのこと…あなたはここに居ては駄目。逃げなさい！！私の二の舞になるのは駄目よ」

私は静かに目を覚ます。

その声を今も忘れられないのは何故？

その声の持ち主は…思い出したくてももう思い出せないのだろう、きっと。

私の記憶はあそこに置いて来てしまった。

6歳〜9歳までの記憶は私にはない。

そして、母親と父親の事も覚えていない。

覚えているのは、3歳ごろから6歳の誕生日の日までと9歳と7ヶ月になってからの記憶…。

それから、顔も覚えていない少年の顔。

このまま寝ているわけにもいかない。

目を覚まして、高校の入学式へと向かおう

この夢を追い払うために…

私はベットから出て顔を洗いに洗面所へ向かった

あの夢を頭から洗い出すかのように。

プロローグ（後書き）

この続きもぜひ読んでください！！
お願いします。

電話（前書き）

頑張つて書きます。
短くてすみません

電話

今日は入学式…。

私は6：00に目が覚めたので朝ごはんをのんびりと作っている。アパートに独りで暮らしていると、音が物足りない。

目玉焼きとベーコン、サラダ、バタートーストをお皿に乗せると電話がかかってきた。

ケータイの画面にはあの子の名前。

珍しく6：30に目を覚ましたらしい。

自慢の電話でも来たのだろうか。

・・・でないとうるさいだろうな。

「・・・おはよう。どうかしたの？」

ああ、きつと自慢でもしてくるのだろうか、と思っていたが驚くことに違った。

『千乃……。今日って何時に集合だった？』

「また……。？7：40にミレーニアの家の前」

そう。電話の相手はこのミレーニアと言う少女。私の親友だ。

そして私は千乃^{ちの}。

ミレーニアは

『あつ。そうだった。ありがとう。後でね。』

と言ってケータイを切る。

後ろからミレーニアのお父さんの声が聞こえてきたから、これから探偵の仕事に行くのだろう。

さて・・・朝ご飯を食べよう。

すると再びケータイは鳴った。

電話（後書き）

千乃：・・・短すぎない？

真架（作者）：す・・・スイマセン！！

ミレーニア：まあまあ。真架も2作品連続投稿で疲れてんだよ。

真：ミレーニア！！いい子だね！明日も忙しいのにがんばって書いてんだよ！！

千：言い訳じゃん。

真：グハッ！！

千：ツハ！！また性格が寝起きに戻ってた。

ミ：ほら、真架に謝るときな。

千：ごめんね。真架、頑張ってたね。投稿しなかったら怒るけど！！

真：ヒュー！！なるべくしますから！！

千：なら良いけど。

ミ：今回のお話を読んでいただき

千：本当にありがとう。

真：次回も

ミ：千・真…よろしくお願いします。

again

(前書き)

こんにちは^^

真架なのでありまーす!!

どうか楽しんでいただけると言いのですが・・・。
それでは、どうぞ

再びケータイが鳴った。

ケータイの液晶画面にはミレーニアではない名前が出ていた。

「次は彩我か……。ハァー……。」

私は短くため息をついた。

彩我さいがは男だが親友だ。

ミレーニアと彩我と私の3人は中学でもつるんでいた仲間だ。

そしてリシレという組織の仲間でもある。

とりあえず……。電話に出てあげよう。

「……。お早う。どうかしたの？」

「千乃……。今日って入学式じゃん。今ね、任務があるから今日の12時にミレーニアのお父さんの探偵事務所に来てって連絡が来てさ……。それまでに学校終わると思う？」

こいつもちゃんと人の話し、聞いてたのか？

昨日言っただじゃん、何時に学校終わるか。

「それって回すの？ってか終わるよ……。昨日言っただじゃん。11時には学校終わるって。」

「そっか……。良かった。えっとねえ、千乃が最後だから大丈夫だよ、回さなくって。」

「あつそ。じゃあね」

「おう！！」

もう1度、次は深くため息をついて私は食事を再開した。

食べ終わって食器を洗い終えて時計を見ると7:02だった。待ち合わせ場所までは3分でいける。

着替えて……。本でも読もう。

本が12ページ進んだとき、再びケータイが鳴った。

7:35にセットしたアラームだった。

制服で家を出て鍵を閉めた。

近所で咲いている桜たちは散っているのに笑っているようだった。待ち合わせ場所にはちゃんと3分で着いた。

先に彩我が着いていた。

「おっ！千乃、お早う。実は俺、時間間違えちゃって35分に着いちちゃったんだ。」

寝起きだと口調（たまに性格も）が違う私はもう通常に戻っていた。「それはドンマイだね。あれ？もう41分なのにミレーニア来ない。チャイム鳴らす？」

そついうと目の前の家からミレーニアが出てきた。

「ごめん。時計見たら41分で……。」

ミレーニアらしいという意味をこめて笑った。

「ふえっ。何で笑うの？それより行こうよ。」

ミレーニアが歩き出したので、私が彩我はそれを追って学校へ向かった。

a g a i n

(後書き)

彩我：初めまして。彩我だよ^^

真架：今日は雑談しないんだけど。

彩：マジで!!じゃあ、何やるの？

真：プロフィール。

彩：俺の？良し来た!!俺は・・・

真：違うし!!勿論千乃のだよ!!

名前 近江^{おじみ}千乃^{ちの}

見た目 髪の毛と目の色はスカイブルー、髪型はセミロングで前髪を作っている。

癖 何かを我慢するときに首に手を添える。

身長 162cm

体重 48kg

誕生日 5月14日

能力 雷・空間魔法

武器 弓矢(いつもはネックレスの中に魔法でしまっている)

真：こんな感じじゃない？まだ能力は使っていないけどね。

彩：それなのにいいの？こんな風に発表しちゃって。

真：気にしない!!私は気にしないからいいの。それより・・・読

んでくれた人にお礼を言おうか？

彩：了解！！これを読んでくれた皆。ほんっとに有難う！！

「先・・・輩」(前書き)

さらに2人新しく登場します。
みなさん、温かい目で見てください。

「先……輩」

学校に着くと、クラス表がはり出されていた。

8クラスまで書いてあるのがなんとか見える。

8クラスにわかるる……という事は同じクラスになれるという可能性は少ない。

クラス表がはり出されている門の近くには人が群がっており、名前がどこに書いてあるのか見えない。

「千乃、ミレーニア、彩我！」

男性の声が千乃の背後から聞こえた。

振り返ると見慣れた男女の学生が居た。

彩我はその男女に

「あつ！！ペトラとひな」

といった。一応みんなには言っておくが……相手は先輩だ。

「彩我……一応俺たちは先輩だからな」

ペトラと呼ばれたのが答えた。

ペトラ・サンクルが彼の名前だ。

ひなと呼ばれた女の先輩は

「3人とも一緒のクラスだから……。リシレからの要望でね」

と言った。ひなは私よりも目線が下である。

イコール、身長が低い（のが特徴的である）。

ひなは真田^{まいた} ひなと言う。

ペトラは彩我に

「ほら、言ってみる。ペトラ先輩」

と、教育中。

「ペトラ先……先……ぱ……い」

何か抵抗があるらしい。

「ひな先輩とペトラ先輩も同じクラスなんですか？」

ペトラは先輩と呼ばれてニツと笑った。（性格には口角を上げた……

・と言っべきだろうか)

「彩我、千乃はちゃんと先輩って呼んだぞ。エラ・・・」

「ペトラ・・・うるさい。ペトラと私は同じクラスよ」

ミレーニアはペトラに励ましにならない励ましをしていた。

「ペトラ先輩。大丈夫だよ。彩我は同じ歳くらい若く見えるっっていう意味で“先輩”って呼べないだけだよ、きつと」

・・・ミレーニア。それって童顔ともとらえられるし、1年の差だから普通っちゃ普通。

ってかお前もタメ口かよ!!

「ペトラ先・・・輩」

彩我がペトラを呼ぶ。

さつきよりは詰まっていけない。

ペトラは彩我のほうを向く。

「俺たちって何組か・・・知ってます?」

彩我はちゃんと敬語を使って喋った。

ペトラはあからさまに嬉しそうな顔をして答えた。

「階段から一番近い4組」

1組の隣はコンピューター室で玄関から遠いらしい。

5組の隣はトイレ。8組の隣は美術室。

「しかも、屋上への階段もある。5階だしな」

ココは5階建ての学校だ。

ペトラの言葉にミレーニアが聞いた。

「さすがに学校にあいつらが来ても空からはきませんよねえ」

その言葉に一同は動きを止めた。

「先・・・輩」(後書き)

スイマセン!!

約束守れません。

今回は時間がないため、プロフィールの紹介は無理そうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645y/>

あの夢を見たのは・・・いつだっけ？

2011年11月20日20時04分発行